

三重県粥見井尻, 筋違, 内垣外遺跡から得られた¹⁴C年代値とその意義

Radiocarbon ages and significance from Kayumi-ijiri, Sujikai and Uchigaito sites, Mie Prefecture, central Japan

森 勇一¹・中村俊夫²・本堂弘之³・川崎志乃⁴・奥 義次³

Yuichi Mori¹, Toshio Nakamura², Hiroyuki Hondo³, Shino Kawasaki⁴, Yoshiji Oku⁵

¹ 金城学院大学・² 名古屋大学年代測定総合研究センター・³ 三重県史編さんグループ・⁴ 奈良県立橿原考古学研究所

¹ Faculty of Pharmacy, Kinjo Gakuin University, 2-1723 Omori, Moriyama, Nagoya, 463-8521 Japan

² Center for Chronological Research, Nagoya University, Chikusa, Nagoya 464-8602 Japan

³ Editorial Group of Mie Prefectural History, 1-954 Sakae-machi, Tsu 514-0004 Japan

⁴ The Museum, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, 50-2 Unebi-cho, Kashihara, Nara 634-0065 Japan

*Corresponding author, E-mail: y-mori@ccnetmie.ne.jp

Abstract

AMS¹⁴C dates have been measured by using a Tandemron accelerator mass spectrometer at Dating and Materials Research Center, Nagoya University.

The analysis samples collected solid-carbons of the pottery surface and charcoal fragments found from three archaeological sites.

Radiocarbon ages from Kayumi-ijiri site of the beginning Jomon period in Mie Prefecture were 11,444 ± 34yrsBP (NUTA2-18517), 11,385 ± 33yrsBP (NUTA2-18732), 11,441 ± 35yrsBP (NUTA2-18732). Radiocarbon ages from Sujikai site of the early Yayoi period in Mie Prefecture were 3,602 ± 38yrsBP (NUTA2-18408), 2,445 ± 34 ± 33yrsBP (NUTA2-18409). Radiocarbon ages from Uchigaito site of the late Paleolithic period in Mie Prefecture were 25,418 ± 122yrsBP (NUTA2-18402), 21,127 ± 92 yrsBP (NUTA2-18403).

Judging from radiocarbon ages, the Kayumi-ijiri clay figure seems to be the oldest in Japan.

Keywords: ¹⁴C年代値; 粥見井尻遺跡; 筋違遺跡; 内垣外遺跡

Radiocarbon ages; Kayumi-ijiri site; Sujikai site; Uchigaito site

1. はじめに

三重県粥見井尻遺跡(図1)は松阪市飯南町粥見に位置し、縄文時代草創期の住居跡が発見された遺跡である。遺跡は、櫛田川が大きく蛇行する河岸段丘左岸の見晴らしの良い高台に営まれている。筋違遺跡(図1)は近鉄中川駅から東に約2km、松阪市嬉野新屋庄町筋違の沖積低地上に成立した弥生時代前期の集落遺跡である。弥生時代前期の生産域、

とくに灌漑用水路を伴う水田跡が多数発見されたことで知られる。内垣外遺跡（図1）は、多気郡多気町相鹿瀬に位置する旧石器時代から縄文時代、古代、中近世にかけての複合遺跡であり、とりわけ後期旧石器時代の石器やヒトの居住に伴う多数の炭片が確認された遺跡として知られる。

これら3遺跡は、いずれも三重県を代表する重要な遺跡であるが、考古遺物の編年上の位置づけはなされていても、遺跡や遺物を他地域と対比するための客観的な年代値は明らかになっていなかった。Fig.1 The location of Kayumi-ijiri, Sujikai, and Uchigaito sites 三重県史通史編（原始古代）の執筆を契機に、こうした課題を解決するため、名古屋大学年代測定総合研究センターの協力を得て、遺跡に関わる AMS 放射性炭素年代を測定することとした。



図1. 粥見井尻，筋違，および内垣外遺跡の位置

2. 年代測定のねらい

2-1. 粥見井尻遺跡

粥見井尻遺跡では計3棟の縄文時代草創期の建物跡が発掘されたが、建物跡から2体の土偶が確認された。うち一体は、中央の建物跡から見つかったもので、高さ6.8cm、幅4.2cm、簡素な造りながら胸部を誇張した完形の土偶である（図2）。もう一体は、別の建物跡から、頭部だけが発見された。見つかったのは1996年9月のことであるが、縄文時代草創期の土偶は日本初発見であったため、「日本最古の土偶」として話題になった。だが、今日に至るまで、この土偶（粥見井尻土偶）に関わる年代測定はなされていなかった。

粥見井尻土偶に共伴する縄文時代草創期の無文土器は果たしてどのような年代値を示し、日本最古の土偶という評価は



図2. 粥見井尻遺跡の土偶（三重県埋蔵文化財センター，1996）

Fig.2 The Kayumi-ijiri clay figure (Archaeological center of Mie Prefecture, 1996)

正しいのだろうか。2011 年 12 月、三重県埋蔵文化財センター中勢事務所にて土器付着炭化物の試料採取を実施し、放射性炭素年代を測定した。

2-2. 筋違遺跡

筋違遺跡の 2005 年度の第三次調査では、弥生時代前期上層遺構面の発掘調査が行われ、旧河道や水路によって区画された弥生時代前期前半の集落が、洪水層で覆われた状態で発見された（図 3）。これ以外にも、古墳時代中期の水田跡や古代・中世の遺構などが確認され、雲出川のたび重なる洪水に襲われながらも、人々が何度も氾濫平野の開発に従事したことが明らかになっている。本遺跡からは、弥生時代前期の指標土器とされ、北部九州に起源がある遠賀川系土器が多数発見され、また朝鮮半島に起源地を持つ松菊里住居跡が確認されるなど、三重県下屈指の弥生時代前期の集落遺跡であるとされている。

近年、西日本を中心に弥生時代の実年代が大きく遡りつつあり、本遺跡における弥生時代前期土器の編年がどのくらいに位置づけられるのか、確かめるのが本研究のねらいの一つである。



図 3. 筋違遺跡の主な遺構図（三重県埋蔵文化財センター，2007）

Fig3 Principal ruins of the Sujikai site (Archaeological center of Mie Prefecture, 2007)

2-3. 内垣外遺跡

内垣外遺跡は、県道相鹿瀬－大台線整備事業の過程で発見されたものであり、遺跡は標高約 48m の丘陵地の裾部に位置している。地形のうえでは、宮川水系の支谷が形成した

小規模な河岸段丘上にはのっているものと考えられるが、遺跡の北 2 km に中央構造線が東西に延びており、遺跡のすぐ西側にも東西性の構造谷が発達している。このため、内垣外遺跡の立地や地形発達を考えるには、東西性の地形成分は無視できない存在となっている。

本遺跡では、後期旧石器時代の石器を検出する過程で、始良 Tn テフラ (AT 火山灰層) が発見された。本遺跡における層序は、①上層遺構 (室町時代および縄文時代など) の検出面である黒色土、②黄褐色土、③黄褐色粘質土、④やや明るい黄褐色粘質土、⑤明黄褐色粘質土、⑥粘性の弱い明黄褐色粘質土とされている (西出, 1999)。始良 Tn テフラは、「やや明るい黄褐色粘質土」からブロック状に分散した状態で発見された。後期旧石器時代の遺物やこれに伴われた炭片などは、始良 Tn テフラを含む地層だけでなく、この下位からも見つかったという (西出, 1999)。だが、これまで分かっている状況証拠からは、考古遺物と始良 Tn テフラとの関係は必ずしも明確ではなく、また始良 Tn テフラそのものも二次堆積でない、とする確証は得られておらず、そのため内垣外遺跡における人類の活動がいつに遡るのか、後期旧石器時代の石器に伴われた炭片試料を用いて年代を求める必要性にせまられていた。

3. 年代測定結果

粥見井尻遺跡については縄文時代草創期の無紋土器片の内面および外面より 3 点、筋違遺跡では弥生時代前期の土器片の外面より 2 点、稲粃試料より 1 点、内垣外遺跡では始良 Tn テフラ下位から検出されたとされる炭片試料計 2 点について、名古屋大学年代測定総合研究センターの加速器質量分析計を用いて、年代測定を実施した。試料精製と測定は筆者の一人中村俊夫が行った。測定の結果得られた年代値は、表 1 のとおりである。

表 1. 三重県粥見井尻、筋違、内垣外遺跡から得られた放射性炭素年代測定値

Table 1 Radiocarbon ages from Kayumi-ijiri, Sujikai and Uchigaito sites, Mie Prefecture

Labo code	遺跡名	分析試料	^{14}C (yrsBP)	暦年校正結果 (確率 95.5 %)
NUTA2-18517	粥見井尻遺跡 Eb-6	土器内面炭化物	11,444 $\pm$ 34	13,417-13,199
NUTA2-18732	粥見井尻遺跡 Gb-5	土器外面炭化物	11,385 $\pm$ 33	13,359-13,145
NUTA2-18732	粥見井尻遺跡 Gb-5	土器外面炭化物	11,441 $\pm$ 35	13,415-13,194
NUTA2-18408	筋違遺跡 BG18	土器外面炭化物	3,602 $\pm$ 38	4,074-3,780
NUTA2-18409	筋違遺跡 BG18	土器外面炭化物	2,445 $\pm$ 34	2,702-2,357
	筋違遺跡稲粃試料		試料不足のため分析不能	
NUTA2-18402	内垣外遺跡 N11W22	No.54 炭片	25,418 $\pm$ 122	30,585-29,655
NUTA2-18403	内垣外遺跡 N11W22	No.55 炭片	21,127 $\pm$ 92	25,612-24,913

粥見井尻遺跡の土器付着炭化物から得られた ^{14}C 年代値は、11,444 $\pm$ 34yrsBP (NUTA2-18517), 11,385 $\pm$ 33yrsBP (NUTA2-18732), 11,441 $\pm$ 35yrsBP (NUTA2-18732 ; 再測定) であった。その暦年校正年代 (95.5 % の確率) は、それぞれ 13,417-13,199calBP, 13,359-13,145calBP, 13,415-13,194calBP である。

筋違遺跡の土器付着炭化物より求めた ^{14}C 年代測定値は、 $3,602 \pm 38\text{yrsBP}$ (NUTA2-18408), $2,445 \pm 34\text{yrsBP}$ (NUTA2-18409) であった。その暦年校正年代 (95.5 % の確率) は、 $4,074\text{--}3,780\text{calBP}$, $2,702\text{--}2,357\text{calBP}$ である。

内垣外遺跡の炭片から得られた ^{14}C 年代値は、 $25,418 \pm 122\text{yrsBP}$ (NUTA2-18402), $21,127 \pm 92\text{yrsBP}$ (NUTA2-18403) であった。これらの暦年校正年代 (95.5 % の確率) は、 $30,585\text{--}29,655\text{calBP}$, $25,612\text{--}24,913\text{calBP}$ である。

4. 考 察

4-1. 粥見井尻遺跡

縄文時代草創期の粥見井尻遺跡の土器付着炭化物から得られた放射性炭素年代値は、 $11,444 \pm 34 \sim 11,385 \pm 33\text{yrsBP}$ を示し、この結果はこれまで知られている縄文時代草創期の年代に比べて妥当な数値といえる。暦年校正年代では、 $13,417 \sim 13,145\text{calBP}$ の間にすべての年代値が収まり、まとまりのある測定結果といえる。この年代値を、グリーンランドの氷床コア中に記録された酸素同位体比から得られた最終氷期以降後氷期に至る気候変動曲線 (Stuiver et al., 1995) にあてはめて考えると、粥見井尻遺跡でヒトが生活した時期は晩氷期のなかば、アレレード亜間氷期と呼ばれる温暖期にあたるのが分かる。この少し前には、ベーリング亜間氷期というさらに暖かい時期があり、最終氷期以降、気候は確実に温暖化の傾向に向かっていた。そして、その後訪れるヤンガードリアス寒冷期の厳しい寒の戻りを経て、完新世の急速な温暖期に突入する。粥見井尻遺跡から発見された土偶は、こうした時代背景の中の製作物といえる。

2010 年になって、滋賀県東近江市永源寺町の相谷熊原遺跡から、粥見井尻遺跡と同じ縄文時代草創期の土偶が発見された。相谷熊原遺跡の土偶は、高さ 3.1cm で小型の土偶であり、相伴土器の付着炭化物から求められた校正年代はおおよそ 13,000 年前とされている (松室・重田, 2010)。年代値をみる限り、明らかに粥見井尻遺跡の土偶は、相谷熊原土偶より古いものといえる。

4-2. 筋違遺跡

筋違遺跡から得られた放射性炭素年代のうち、1 点は $2,445 \pm 34\text{yrsBP}$ という測定値であった。この年代は、今日、一般に知られている弥生時代前期の始まりを紀元前 3 世紀ころとする年代観に照らすと、いささか古い値であるのかもしれない。しかし、北部九州では、従来弥生時代前期の指標土器とされてきた板付Ⅰおよび板付Ⅱ式土器に付着したススの年代が、 $2,560 \pm 40\text{yrsBP}$, $2,620 \pm 40\text{yrsBP}$ などとする測定結果が得られており (藤尾ほか, 2003)、弥生時代の始まりを紀元前 10 世紀後半にまで遡らせる見解も示されている (春成ほか, 2003)。こうした結果を考慮すると、本遺跡から得られた年代値は弥生時代前期前半の土器編年としては妥当なものといえる。三重県内に弥生文化が波及し、雲出川下流の沖積低地に灌漑用水を完備した水稻耕作が営まれた時期がはたしてこの年代まで遡るかどうかは定かでないが、弥生時代前期の年代観を考えるうえで意義があるものといえる。

残る 1 点の年代値は $3,602 \pm 38\text{yrsBP}$ を示した。この値は、弥生時代前期の年代値としては到底考えることができない古いものであり、土器付着炭化物中に年代を古くさせる

何らかの混入物が存在した可能性が考えられる。

4-3. 内垣外遺跡

内垣外遺跡の始良 Tn テフラ (AT 火山灰層) の下位から得られたとする炭片の ^{14}C 年代値は, $25,418 \pm 122\text{yrsBP}$ と $21,127 \pm 92\text{yrsBP}$ の 2 点であった。それらの暦年校正年代は, それぞれ $30,585\text{-}29,655\text{calBP}$ と $25,612\text{-}24,913\text{calBP}$ である。

今日, 始良 Tn テフラの降灰年代は, 約 2.2 ~ 2.5 万年前とされている。このテフラの降灰年代を暦年補正する試みも行われているが, いまだその値は定まっていない。

後期旧石器時代の遺跡と始良 Tn テフラとの関係を見ると, 始良 Tn テフラより下位であることがはっきりしている遺跡は国内でも非常に少なく, 始良 Tn テフラ以降は遺跡数が急増している (町田・新井, 2011)。

内垣外遺跡における後期旧石器時代の石器やヒトの生活痕である炭片などは, 始良 Tn テフラ下位の文化層に相当する可能性もないではない。だが, 放射性炭素年代の測定結果や, 内垣外遺跡の立地環境が日当たりの良い南向き緩斜面の崖際 (西出, 1999) であることからすると, 内垣外遺跡にヒトが居住した時代は始良 Tn テフラ降灰以降かせいぜい始良 Tn テフラ降灰期と考えるのが妥当であろう。

謝 辞

年代測定試料の採取にあたって, 三重県埋蔵文化財センターに大変お世話になった。記してお礼申しあげる。

文 献

- 西出 孝 (1999) 多気町内垣外遺跡の下層遺物. 三重県埋蔵文化財センター紀要第 8 号, 7-17.
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本 稔 (2003) 弥生時代の開始年代 - ^{14}C 年代の測定結果について - . 日本考古学協会第 69 回総会研究発表要旨, 65-68.
- 藤尾慎一郎・坂本稔・今村峯雄 (2003) 第 5 章 福岡市雀居遺跡出土土器に付着したススの炭素年代測定. 福岡市埋蔵文化財調査報告書 (第 748 集) 福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告雀居 9, 福岡市教育委員会, 27-32.
- 町田 洋・新井房夫 (2011) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松室 孝樹・重田 勉 (2010) 滋賀県出土の草創期土偶の新例 - 相谷熊原遺跡 - . 考古学ジャーナル, 12, 29-31.
- Stuiver, M., Grootes, P. M. & Braziunas, T. F. (1995) The GIPS2d ^{18}O record of the past 16, 500 years and the role of the sun, ocean and volcanoes. *Quaternary Research* 44, 341-354.